浸潤性膵管癌における背景Pancreatic intraepithelial neoplasia (PanIN)と分子生物学特徴の関連の解析

【はじめに】

浸潤性膵管癌は予後の悪い腫瘍の一つです。浸潤性膵管癌の前駆病変の一つには膵上皮内腫瘍性病変（pancreatic intraepithelial neoplasia: PanIN)があります。浸潤性膵管癌は低異型度のPanIN-1、中等度異型のPanIN-2、高度異型のPanIN-3、浸潤癌と段階的に発癌すると言われています。PanINから浸潤性膵管癌へ段階的な進行に伴い、癌遺伝子であるKRASの変異、癌抑制遺伝子であるp53, p16, SMAD4などの欠失の頻度が増加してきます。以前当教室では膵癌の背景にあるPanINを評価し、PanIN-2, 3を認めない膵癌は予後不良であると報告しました。浸潤性膵管癌においてp53, p16, SMAD4蛋白発現、KRAS遺伝子変異を検討し、背景PanINとの相関を検討します。

【対象】

1992年5月1日から2009年12月31日までの期間に当院形態機能病理学教室において浸潤性膵管癌と診断された方100名の組織標本を対象に研究を行います。対象者になることを希望されない場合は、下記連絡先まで連絡をお願いいたします。

【研究内容】

九州大学形態機能病理学教室において診断された浸潤性膵管癌の標本を使って、背景にあるPanINで分類し（図1、図2、図3）、臨床病理学的因子（年齢、性別、喫煙歴、飲酒歴、分化度、脈管侵襲の有無、腫瘍径、膵周囲組織への浸潤の有無、リンパ節転移の有無、遠隔転移の有無）との関連を検討し、p53, p16, SMAD4蛋白の発現、KRAS遺伝子変異の検索を行います。

この研究を行うことで患者さんに日常診療以外の余分な負担は生じていません。

図1. 浸潤性膵管癌（肉眼像）

【患者さんの個人情報の保護について】

本研究では個人情報漏洩を防ぐため、氏名、カルテ番号などの個人を特定できる情報を削除し、匿名化した上で、データの数字化などの厳格な対策を取っています。本研究の実施過程及びその結果の公表（学会や論文等）の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

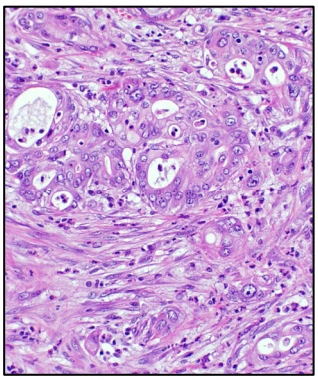

図2. 浸潤性膵管癌（組織像）

【研究期間】

承認日から2018年 3月31日まで

【医学上の貢献】

浸潤性膵管癌における背景のPanIN、形質発現の相違を解析することにより、癌の悪性度における背景PanINの生物学的意義、背景にある分子生物学的特徴がより詳細に解明され、予後予測因子としての有用性を高め、その腫瘍の特性に即した治療の選択につながる可能性がある、など医学上の貢献はあるものと考えます。

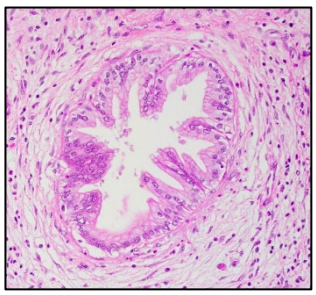

図3. PanIN（組織像）

【研究機関】

研究責任者　九州大学大学院　医学研究院　形態機能病理学　教授　小田　義直

研究分担者　九州大学大学院　医学研究院　形態機能病理学　准教授　大石　善丈

九州大学大学院　医学系学府　形態機能病理学　大学院生　宮崎　哲之

九州大学大学院　医学研究院　臨床・腫瘍外科　教授　中村　雅史

九州大学大学院　医学研究院　臨床・腫瘍外科　助教　宮坂　義浩

連絡先：〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel　092-642-6069　担当：宮崎　哲之